

ツ下がりの名鳥なり、大藏聞といなや、此鳥ほしくなりぬ云々、岩翁が若葉合、第二介我やくそくも二處なり、月二夜鶉合は金ほどの聲麥うづらと稱するは、麥秋の頃、諸方より取て出す、江戸には南部より多く来る、近年明和安永の頃、鶉合の事流行て、大諸侯競ひて是を飼はれける、鳥籠は金銀を鏤め、唐木、象牙、螺鈿、高蒔繪にて、皆一雙ツ、に作らせ、装束は足かけ、天幕金欄、猩々緋のたぐい、用ひざるものなし、其會日には、江戸中鳥好のものは、是また件のごとく美を盡し、よき鳥をえらび持出て、勝負をなす、鶉は朝をむねと啼ものなれば、必朝早く會あり、飼鳥屋は江戸中ののみな集り、よしあしを聞わけ、甲乙をさだめ、角力番付の如くに東西を分ち、一二を以てゑるす、大奉書を横につぎて書付、東西の壁上に貼付、もし一となれば、鳥屋共に祝義として、目録を遣す、此費許多なり、凡鶉はよき鳥ありても、其音を移す付子などする事ならぬものにて、鶉などのごとく、其類出來ず、其うへ何ぞ驚さわげば、忽胸をうちて死する事あり、高價をもて買ふは、かはりたる物すきにて、鶉飼をいやしむとかや、近頃は鶉を子を生せ

鶉の雌をあひふといふ、懷子、草枯やあひ夫うづらも床はなれ、巴鶉を飼ふ者、よく其聲をまねて口笛に吹ば、是を聞て雄なく、同集なければなく、真似の入江のうづら哉、治宗西土には闘鶉とて、鶏のごとく戦はしむ、五雜俎云、江北有闘鶉、其鳥小而馴出、入懷袖、視闘雞、又似近雅云々、鶉雖小而馴然、最勇健、善闘、食粟者不過再闘、食稌者尤耿介、一闘而決、故詩言鶉之奔々、言其健也、また花鏡に、凡鳥性畏人、惟鶉性喜近人、諸禽闘則尾竦、獨鶉其足而舒其翼、人多畜之、使闘、有鶉之雄、頗足戲玩、また小き布袋に納れ、身邊に近づけ、放ちて養ことなども記したり、此戲はこゝにてせざる事なり、唯放し飼にすることもなし、此外の鳥は放ち飼にする事、古くもありしなるべし、

〔飼鳥必用上〕巾著鶉とて、袋に入腰に提、座敷にて袋を出し啼する仕込方、荒鳥を野移にして、雙の羽をこき、厚きれにて六七寸廻りなる巾著を拵へ、口は如常緒にて、能